

第十一章 土地の地代——その性質と形成（四）

過去四世紀における銀価の変動に関する補論

第一期

一三五〇年ごろ（その少し前を含む）、イングランドの小麦一クォーターの平均価格は、タワー・ウェイトで銀四オンス、現行換算で約二十シリングと見積もられていた。その後は緩やかに下がり、十六世紀初頭には銀二オンス（約十シリング）となり、およそ一五七〇年ごろまでその水準が続いたとみられる。

一三五〇年（エドワード三世在位二十五年）には、いわゆる労働者法が制定された。前文は、奉公人が賃上げを画策する増長を嘆き、以後は奉公人・労働者の賃金と給餌（当時のリヴァリーは衣だけでなく食の配給も含む）を、在位二十年目およびその前四年間の水準に据え置くとし、給餌用小麦は全国一律で一ブッシェル十ペンスを上限に評価し、支給は現物か現金かを主人が選べると定めた。すなわち、在位二十五年当時の「十ペンス／ブッシェル」は、特別法で受領を義務づけねばならないほど「相当に穏当な価格」であり、この水準は法が参照する十年前（在位十六年）でも妥当と見なされて

いた。当時の十ペンスはタワー・ウェイトで銀約半オンス（現行のハーフクラウン相当）に当たり、したがって銀四オンス（当時六シリング八ペンス、現行で約二十シリング）は、八ブッシェル一クォーターの中庸な価格と認識されていた。

当時の「中庸な穀価」を知る手がかりとしては、年代記や著述に残る異常年の高騰・暴落の数字よりも、この労働者法の規定のほうがはるかに信頼できる。特異な年の値段から平時の水準を推し量るのは難しいからである。さらに、十四世紀初頭（その少し前を含む）の小麦の一般相場が一クォーター当たり銀四オンスを下回らず、他の穀物もこれに準じた比率であったとみなすべき根拠が、ほかにもいくつかある。

一三〇九年、カンタベリーの聖オーガスティン修道院で院長に就いたラルフ・ド・ボーンの就任饗宴について、ウィリアム・ソーンが献立と諸物価を記した。小麦は五十三クォーターで十九ポンド（一区画七シリング二ペンス、現行換算で約二十一シリング六ペンス）、モルトは五十八クォーターで十七ポンド十シリング（一区画六シリング、同約十八シリング）、オーツは二十クォーターで四ポンド（一区画四シリング、同約十二シリング）である。ここでは、モルトとオーツの値付けが小麦に対する通常比よりやや高めに見える。

これらの価格は、異常な高値や安値だったから記されたのではない。豪奢で名高い饗宴で大量に調達・消費された穀物について、実際に支払われた額がたまたま明記されたにすぎない。

一二六二年（ヘンリー三世在位第五十一年）、古法「パンとエールのアサイズ」が復活した。王の前文は、同法が先王たちに遡るもので、少なくとも祖父ヘンリー二世期、さらに征服期まで古い可能性に触れる。規定は、小麦一区画（一クォーター）の相場が一〇二十シリングの範囲で動くことを前提に、パンの価格を連動させる仕組みである。かかる法は通常、中央値を挟む上下の変動を均衡的に想定して設計されるため、初出時の小麦の中央値は十シリング（タワー・ウェイト銀六オンスⅡ現行約三十シリング）で、在位第五十一年当時も同水準と見てよい。ゆえに、中位価格は最高値二十シリングの三分の一、すなわち六シリング八ペンス（銀四オンス）を下らなかったと推定できる。

以上の事実を総合すると、十四世紀半ば頃、しかもそのかなり前から、小麦一区画の平均価格はタワー目の銀四オンス以上と見なされていたと結論できる。

その後、十四世紀半ばから十六世紀初頭にかけて、小麦の通常の平均価格は徐々に下がり、最終的に当初水準の約半分、すなわちタワー目で銀約二オンス（現行貨幣で約十

シリング)に落ち着き、この水準はおおむね一五七〇年頃まで続いた。

一五一二年作成の『第五代ノーサンバールランド伯ヘンリー家計簿』には、小麦一区画の見積価格として六シリング八ペンスと五シリング八ペンスの二通りが併記されている。うち六シリング八ペンスは当時のタワー・ウェイト銀二オンスに相当し、現行貨幣価値で約十シリングに当たる。

また、複数の制定法によれば、エドワード三世在位第二十五年からエリザベス朝初頭までの二百余年、六シリング八ペンスが小麦の適正(中庸)価格、すなわち通常の平均水準とされていた。他方、その名目額に対応する銀の実量は貨幣改変で一貫して目減りしたが、銀の相対的価値の上昇が減少分を相殺したと見なされ、立法当局は特段問題視しなかった。

一四三六年には、小麦が六シリング八ペンス以下なら許可証なしの輸出を認め、一四六三年には一区画(一クォーター)当たり六シリング八ペンスを超えないかぎり輸入を禁ずると定めた。すなわち、安値時は輸出を許し、高値時は輸入解禁が妥当だと立法府は判断したのである。当時の六シリング八ペンスに含まれる銀量は現行換算で一三シリング四ペンス相当(エドワード三世期の同額より約三分の一少ない)とされ、小麦の

「中庸で妥当な価格」とみなされた。

その後、小麦の輸出については、一五五四年（フィリップ&メアリー治世第一・第二年法）と一五五八年（エリザベス一世治世第一年法）で、一区画六シリング八ペンスを超える場合は輸出禁止とした。当時の六シリング八ペンスは現行同額より銀含有量が二ペンス分多い程度にすぎず、この低い上限は実務上ほぼ全面禁止に等しいと判明したため、一五六二年（エリザベス一世治世第五年法）には方針を改め、指定港に限り一区画十シリング（含有銀量は現行同額とほぼ同等）以下の輸出を解禁し、これを「中庸で妥当な小麦価格」と位置づけた。これは一五一二年のノーサンバーランド家計簿の見積りともおおむね一致する。

フランスでは、十五世紀末から十六世紀初頭の平均穀物価格が、それ以前の二世紀より明らかに低かったと、デュプレ・ド・サン＝モールおよび『穀物警察論（穀物取締論）』の著者が指摘しており、同時期には欧州の広い地域でも同様の下落があったと見られる。

穀物に対する銀の相対価値の上昇は、概ね次のいずれか、またはその併存で説明できる。すなわち、改良や耕作の進展で金属需要だけが増え、供給が据え置かれた場合、あ

るいは需要は不変でも既知鉾山の疲弊で供給が徐々に減って採掘費が上がった場合である。十五世紀末から十六世紀初頭には、欧州各地で政体が安定し、治安の改善が産業と改良を促したため、富の拡大とともに貴金属や贅沢品・装飾品への需要が自然に増えた。産出が増えれば流通通貨も多く必要となり、富裕層の増加は銀器などへの需要をさらに押し上げた。他方、欧州市場を支えた多くの銀鉾山はローマ時代以来の操業で枯渇が進み、採算悪化が進んでいたと考えられる。

もともと、古代の物価を論じた多くの著述家は、ノルマン征服（あるいはカエサルの上征）からアメリカの鉾山発見まで、銀の価値は一貫して下がり続けたとみなしている。その根拠は、小麦などの穀物や土地の粗生産物の価格に関する観察と、「国が富むほど銀の量は自然に増え、銀が増えれば価値は下がる」という通念である。

彼らの穀物価格に対する見方は、しばしば三つの要因に惑わされていたようだ。

昔は地代の大半が穀物や家畜・家禽などの現物納であり、しかも地主が現物か金銭かを選べる条項が置かれ、その換算レート（スコットランドではコンバージョン・プライス）は小作人保護のため市場平均より低く、しばしば半値強に定められた。この慣行は今もスコットランドの多くの地域で家禽に、場所によっては家畜にも残る。穀物でも、

公定穀価（フィアーズ）が整わなければ同様の慣行が続いたであろう。フィアーズは、各郡の実勢に基づき陪審（アサイズ）が毎年、品目・等級別の平均穀価を公に定める制度で、小作人の安全を担保し、地主にとっても固定額ではなくその年のフィアーズ価格で穀物地代を金額換算するほうが便利になった。ところが古価格の収集家は、このコンバージョン・プライスを実勢相場と取り違えがちであった。フリートウッドも一度だけこの誤りを認めたが、著作の性質上、ハシリング／一クオーターという数値を十五回も書き写した後の注記にとどまる。しかも一四二三年のハシリングは現行十六シリングに当たる銀量を含んだのに対し、彼が終点とする一五六二年のハシリングは、名目こそ同じでも銀量はほぼ現在と同水準にまで低下していた。

第二に、古いアサイズ（公定価格）法令が怠慢な書写人に雑に転記され、ときには立法当局みずからの起草も粗雑であったため、彼らは誤解した。

古来のアサイズ法は、まず小麦と大麦が最も安いときのパンとエールの基準価格を定め、その後、穀価が段階的に上がるのに合わせて両者の価格の連動を順に示す仕組みであった。ところが書写人は、しばしば最初の三〜四段階、すなわち最も低い価格帯だけを書き写して労を省き、上位の価格帯も同じ比率で計算できると見なしていたらしい。

ヘンリー三世在位第五十一年の「パンとエールのアサイズ」は、本来、小麦一クォーターの価格が一〜二十シリングの各段階に応じてパン価を段階的に定めていた。ところがラフヘッド版以前の底本写本では、この規定が十二シリングまでしか記されておらず、その欠落に引きずられた複数の著述家が「中位の六シリング（現行換算で約十八シリング）」を当時の通常・平均価格と誤って結論づけた。

同時期に制定の「タンブレルおよびピルロリ法」は、大麦一クォーターの価格が二〜四シリングの範囲で六ペンス動くたびにエールの価格も連動させると定めた。ただし、四シリングを上限とは見ていない。列挙値は高値にも低値にも広げて適用すべき比例の例示にすぎないことは、条文末の「以後は六ペンス上がる／下がるたび、同様に増減させる」から明らかである。表現は拙いが趣旨は明白で、起草過程でも、先の写本転記に見られた書写人のずさんさに劣らぬ無頓着さを立法府自体が示している。

古スコット法典『レギアム・マジエスタタム』の古写本に見えるパン価アサイズは、小麦（スコット・ボルⅡ英クォーターの約二分の一）の価格が十ペンスから三シリングまで動く各段階に応じて、パンの公定価格を定めている。当時のスコット三シリングは、現在のスターリングで約九シリングに相当する。ラディマン氏はここから「小麦の最高

は三シリング、平常は十ペンスー一シリング、多くても二シリング」と結論したが、写本を精査すれば、これらの数値は小麦とパンの「比例の取り方」を示す例示にすぎないことがわかる。条文末の「穀価に留意し、前掲の要領で残りも裁可せよ」が、上限・下限の確定ではなく比例原則の提示であることを明確に示している。

第三に、古い時代に時折現れる極端な安値に引きずられ、「最安値が後世より低ければ平常価格も低かった」と早合点したふしがある。実際には、古代の最高値は後世のどの水準よりも高かった。一二七〇年には、フリートウッドが小麦一クォーター当たり四ポンド十六シリング（現在換算十四ポンド八シリング）、さらに六ポンド八シリング（同一九ポンド四シリング）と記録している。十五世紀末から十六世紀初頭に、これほどの高値は見られない。穀価は常に変動するが、騒乱と無秩序で流通が遮断され、豊作地が隣の凶作地を救えない社会では乱高下が激しい。プランタジネット期（十二世紀中葉～十五世紀末）の英国では、ある地域が豊穰でも、近隣では天候不順や隣接諸侯の侵攻で飢饉が生じ、敵対領の介在で相互支援が途絶した。他方、チューダー朝（十五世紀後半～十六世紀）の強固な統治下では、諸侯は公の治安を乱せず、こうした極端な価格変動は抑え込まれた。

本章末には、フリートウッドが蒐集した一二〇二―一五九七年の小麦価格を現行貨幣に換算し、年代順に十二年ごとの全七区分で掲げ、各区分の末尾にその期間の平均価格を付した。彼が特定できた年は計八十年にとどまり、最後の十二年区分は四年分が欠けるため、一五九八―一六〇一年は著者がイートン・カレッジの記録で補った（本稿における唯一の追補）。概観すれば、十三世紀初頭から十六世紀半ば過ぎにかけて十二年平均は緩やかに下がり、十六世紀末に向けて再び上がる傾向がうかがえる。ただし、彼の収録は異常高・異常安の年に偏りがちで、これのみから断定するのは慎重を要する。それでも、示される範囲では本稿の叙述を支持する。他方、フリートウッド自身は多くの論者と同様、銀の増加につれてその価値は一貫して下がったと考えたが、彼の穀価はこの見解と合致しない。むしろデュプレ・ド・サン＝モールの判断と本稿の説明に符合する。古代物価の実証に最も勤勉かつ忠実であった二人、すなわちフリートウッドとデュプレは見解こそ異なるが、少なくとも小麦価格の事実は驚くほど一致している。

それでも、古代の銀が高価であったとする精密な論者は、根拠を穀物の安さではなく土地の粗生産物の安さに置いてきた。彼らは、穀物は「一種の製造品」で、未開の時代には未加工の家畜・家禽・猟獣より相対的に高かったと言う。たしかに当時それらが穀

物より安かったのは事実だが、理由は銀の高値ではなく、品物そのものの価値が低かったからである。言い換えれば、銀がより多くの労働を買えたのではなく、家畜や鳥獣が体現する労働が少なかったのである。銀は産地のスペイン領アメリカのほうで、長距離輸送や運賃・保険を要する欧州より安くて当然だ。にもかかわらず、ウリョアはブエノスアイレスで三百〜四百頭の群れから選んだ去勢牛一頭が二十一ペンス半、バイロンはチリの首都で良馬が十六シリングだったと記す。自然は肥沃でも未耕地が大半の国では、家畜や鳥獣は少ない労力で手に入るため、少ない労力しか引き出せない。したがって、低い貨幣価格は銀の実質価値の高さではなく、品物の実質価値の低さを示すにすぎない。忘れてはならないのは、銀を含むあらゆる財の価値を測る真の基準は、特定の品目やその集まりではなく「労働」である、ということである。

未開拓に近い地域や人口がまばらな国では、家畜や家禽、猟獣は自然に得られ、しばしば住民の消費を上回るため、たいいてい供給が需要を超える。そのため、社会の段階や改良の進み具合が異なれば、これらが示す労働量、すなわち価値は大きく変わる。

どの社会段階でも穀物は人為の産物であり、産業全体の平均供給は平均需要におおむね適合する。しかも改良の位相が違っても、同一の土壌と気候のもとで同量の穀物を得

るために必要な労働（または同程度の費用）は、平均すればほぼ同じである。耕作の進歩が労働生産性を高めても、農業の主要手段である家畜の価格上昇がその効果を相殺しがちだからである。ゆえに土地の粗生産物のうち、等量を比べたときに労働量を最も均一に表すのは穀物であり、富と改良のあらゆる段階で、価値尺度として穀物は他のいかなる単一商品・商品群にも勝る。したがって各段階における銀の實質価値は、他の品ではなく穀物との比較によって測るのが最も妥当である。

さらに、穀物（すなわち各国の植物性主食）は、どの文明国でも労働者の生計の柱である。農業が拡大するほど土地は動物性より植物性の食料を多く産し、労働者は最も安価で豊富かつ健全な食に依存する。精肉は、最も繁栄し賃金の高い国を除けば比重が小さく、家禽はなお少なく、猟獣はほぼ食卓に上らない。フランスでも、フランスより賃金がやや高いスコットランドでも、精肉は祝祭日などの特別な機会に限られるのが通例である。ゆえに賃金の名目額は精肉などよりも労働者の主食たる穀物の平均価格に強く左右され、同様に金銀の實質価値（すなわちそれで購入〔指揮〕できる労働量）も、どれだけの穀物を買うかによってより強く定まる。

とはいえ、穀物や物価の表層的な動きだけを見て、多くの識者が一様に誤るはずはな

い。背後には「国が富めば銀の量も自然に増え、増えればその価値は下がる」という通説が働いたのだろうが、これは確かな根拠を欠く。わずかな価格観察だけで多くの賢明な著者がここまで惑わされたとは考えにくく、結局のところ、この大衆的思い込みの影響が大きかったのである。

国内の貴金属量が増える要因は二つある。ひとつは供給鉱山の産出が増えること、もうひとつは国民の富、すなわち毎年の労働生産が伸びることである。前者は貴金属の価値下落と切り離せないが、後者は必ずしも価値の低下に直結しない。

まず、より豊かな鉱床が見つければ貴金属の供給は増える。他方、交換相手である生活必需品や便益の量が変わらなければ、同じ量の貴金属で買えるものは減る。したがって、国内の貴金属量の増加が鉱山の産出増によるかぎり、その価値はいくらか必ず下がる。

国の富が増し年々の生産が着実に伸びれば、より多くの財を循環させるために通貨は必然的に増え、可処分財が厚くなるにつれて銀器の需要も高まる。貨幣は必要に迫られて増え、銀器は虚栄や誇示の欲求ゆえに増えるという点で、彫像や絵画など他の贅沢品と同じである。とはいえ、好況期に彫刻家や画家の報酬が不況期より悪化しないのと

同様、金銀の買入れ価格が不利になる理由はない。

金銀の価格は、新鉱の大発見で供給が急増しないかぎり、各国の富の伸びに合わせて上がり、常に貧国より富国で高い。金銀は他の商品と同様に高く買う市場へ流れ、最も支払い余力のある国が最高値を付けるからである。価値の基礎は労働にあり、労働が同程度に評価される国では貨幣賃金は労働者の糧の価格に比例する。他方、糧に恵まれた富国ほど、同量の金銀はより多くの糧と交換できる。二国が遠いほど輸送制約で裁定が利かず価格差は広がり、近ければ縮まる。中国は欧州のどの地域よりも豊かで糧価の差も大きく（中国の米は欧州の小麦より安い）、イングランドはスコットランドより豊かだが穀物の名目価格差はごく小さい。数量当たりではスコットランド産が割安に見えても、品質当たりではむしろ割高である。スコットランドは毎年イングランドから多量の穀物を受け入れ、一般に受入地のほうが価格は高くなりやすいが、品質（粉やミールの歩留まり）で見れば、英産が常に現地産を上回るとは限らない。

中国と欧州の名目賃金の差は生計費の差より大きく、その背景には欧州のほうが労働の実質報酬が高いという事実がある。欧州の多くが成長局面にあるのに対し中国は停滞しているように見えるからである。スコットランドの名目賃金がイングランドを下回る

のも、実質賃金が低く、成長の歩みがイングランドより遅いことによる。移住がスコットランドでは頻繁でイングランドでは稀であることも両国の労働需要の差を物語る。各国の実質賃金の比率は、その時点の富の多寡ではなく、経済が拡大・停滞・縮小のいずれの局面にあるかで定まる。

金や銀は、国が豊かなほど高く評価され、貧しいほど低く評価されるのが通例である。とりわけ発展の遅れた社会では、その価値はほとんど認められない。

大都市では穀物は常に遠隔地より高い。これは都市で銀の価値が低いからではなく、穀物の実質価格が高いからである。銀の運搬負担は場所によらずほぼ一定だが、穀物の都市搬入にははるかに大きな労力と費用がかかるためである。

オランダやジェノヴァ領のような富裕な商業国家で穀物が高いのは、大都市と同様に自給できず輸入に頼るためで、遠隔輸送の費用が価格に重くのしかかるからである。彼らは職工や製造の熟練、労力を省く機械、船舶や流通などの手段には富むが、穀物は乏しい。銀をアムステルダムへ運ぶ手間はダンツイヒ（現グダニスク）へ運ぶのと大差ない一方、穀物をアムステルダムに送る費用ははるかに高い。すなわち銀の実質コストは両地で近くても、穀物の実質コストは大きく異なる。もし両国の実質的な富が減り、人

口が変わらぬまま遠隔地からの調達力が落ちれば、銀の量が減っても穀物は下がらず、飢饉価格に跳ね上がる。人は必需に窮すれば贅沢を手放すため、贅沢品は繁栄期に上がり、困窮期に下がるが、必需品は逆である。必需品の実質価格（それで購入・指揮できる労働量）は貧困時に上がり、豊穰と繁栄の時代に下がる。穀物は必需、銀は贅沢にすぎない。

したがって、一四世紀半ばから十六世紀半ばに富や改良が進み欧州で貴金属が増えたとしても、英国を含む欧州で金銀の価値が下がったとは言にくい。ゆえに、当時の価格資料の収集者が小麦や他の商品価格から銀安を見いだせなかったのなら、富や改良の進展だけで銀価下落を論じる根拠はいつそう乏しい。